
死が二人を...

小笠原 裕嗣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死が二人を…

【Nコード】

N8334Z

【作者名】

小笠原 裕嗣

【あらすじ】

病める時も健やかなる時も、共に歩み、他の者に依らず、死が二人を分かつまで互いを愛することを誓いますか？

小さな約束でも古すぎる約束でも片方が忘れても片方にとっては大切すぎるということがあったら……

一（前書き）

書き上げてありますが少しずつ直しながら投稿していきます
あまり長くはならないと思います

暗い暗い光のない部屋の隅に座り込んだまま動かない僕。

ああ、今日で何日目だろう。あまりに長い時が過ぎていてもうわからない。

いつになったら終わるのだろう。もちろんわからない。

あの娘はいつもどおり奥に連れていかれた。その次は僕だ、それもいつもどおり。今日は奥からいつものも増して言い争いの声が聞こえてくる。

だけど……おかしい。何かの叫び声、いつもと違う何日かぶりの変化。

だめだ見てはいけない。それはこの世に在ってはいけない。ああ、よせばいいのに、久しぶりに芽生えた自分の意志で扉に向かいそして開けてしまう。

あかい部屋、あかい水、それに沈むあの男、あかく染まり呆けた顔のあの娘、それ以上にあかに染まり震える刃を手を持つ女、そして今まで見たことのない嫌な笑顔に変わる顔。

?? 今日あの夢で目が覚める。10年たっても決して消えない7歳の少年にとっては過酷すぎる1年間の地獄。清宮秀一せいみやしゅういちの抱えるこの大きな傷跡は生涯消えることはないだろうが、時の流れはその傷跡に目を向けることなく過ぎることができるとは癒してくれなかった。そんなことを思っていると時間がヤバイことになっていた。高校をサボるといふ選択肢はとる気はなく急いで身支度をする。とくに見た目に気を使ってるわけではないが最低限の身だしなみを整える。あの地獄から戻った直後は憐みの表情ばかりを皆に向けられていたが今は違う。10年も前のことだしそのころは自分と同じ子供だったからろくに覚えてはいない。昔いたところからは離れているか

ら余計忘れ去られてもいる。

そのおかげで過去を知らないでいてくれる友人だつてできていた。しかも寝起きのままだと変にからかってくれるありがたい存在でもある。すべての身支度を終えて遅刻しないように学校には走って向かった。

やはり季節が冬には成りきれていないせいかな顔に薄らと汗がにじんでいる。学校まで走りこんできたのが原因なのだが特に気にはしてはいないようだ。

自分の席に着きふうと一息をつく

「どうしたん遅刻ギリギリなんてめっずらし〜」

この高校に入ってから最初のできた友人であり親友でもある犬崎海さきかいが目の前にいた。

「ん？ しかもテンションやや低めつてとこか。悪夢でも見たん？」

「いや、そんなことはねーけど」

人懐っこそうな表情、軽いもの言いで多くの友人を持つ犬崎だが唐突に核心に近いことを言うことがある。

「まあいつか。とりあえず今日の授業の宿題を頼むわ」

「……まあいいよ」

いつもどおりのことだから特に考えずに了承する。

「サンキュー！ 恩に着るよ！」

そういつもどおりのやり取りをしているとホームルームの始まりの鐘が響いていた。

?? 昼休み。売店に向かいサンドイッチとお茶のセットを買う。

普段ならここで買うことはしないのだが今日の朝は時間がなくてここで買ったもので我慢する。買った昼食を持っていつもどおり中庭のベンチに向かっていた。冬へと季節が変わり始め、校舎の外で食べる人もだいぶ減った中ベンチに一人、茶色の短い髪、小柄な体躯

の荻野琴葉おぎののことばが座っていた。

荻野と清宮は付き合い初めてまだ1か月もたつてなく互いに気恥ずかしさをまだ残したままだ。

小走りで琴葉のもとにはつが悪そうな表情を浮かべつつたどり着いた。

「悪い！ これ買ってたんで少し遅れた！」

「……大丈夫。私も今来たところだから」

やや気恥ずかしそうにしながら答えが返ってきた。そして始まるいつもどおりの昼食風景。たわいのない会話から始まりおだだやかな雰囲気が続く。琴葉といると自分の中に流れ込むおだやかさが清宮には心地よかった。

しかしそんな時間もすぐに終わり午後の授業の始まりが近づいてくる。

「それじゃ行こっか」

適当なところで話を切り上げ教室に戻って行った。

?? 放課後。清宮はやることに特に関心せず早めに家に帰ることにした。琴葉も海もつかまらなかったので一人での帰宅。気が付くと夕日が町中を包んでいた。夕焼けが道全体をあかに染めている。あかい道……何かを思い出しそうになるが首を振ってその思いを振り払う。

「もう……過去のことだ」

そう自分に言いつて聞かせ、あかに染まる道を早足で歩き家に向かう。

一人の少女がドアを背に立っていた。そこは自分の住んでいる家であるのだがはじめて見る少女。いやそれは間違いである。清宮はその少女のことを知っているはずだ、忘れるはずがない。

その少女と目が合ったとき腰まで伸びる長い黒髪をなびかせながら走り寄ってきた。まだ小さな子供のような満面の笑みを浮かべつつも懐かしいものを見るようなやさしい目だった。

「シユウちゃんおかえり。もう、ずっと待ってたんだよ」

「ミ……ナ……」

記憶の底から絞り出すように、確かめるようにその少女、なみはな波華美みな奈の名前を呼んだ。

「よかったあ。やっぱり……ちゃんと覚えててくれたんだ」

そう言って安心した表情を向けてきた。それはあの頃と、いつも一緒にいた10年も前からと変わらない無邪気な笑顔であった。

一（後書き）

よろしければ批評をお願いします

しかし何か違和感のようなものを感じた気がした。しかしそのことは深く考えずにいま目の前で起きてることに注意して忘れるようにした。

「それより突然どうして……？」

疑問を口にした秀一の言葉に美奈は何を言っているのか理解できておらず、ただただ首をかしげているだけであった。

「変なのそんなこと言うなんて」

そういつと美奈は秀一の後ろに回り込み背中を押していた。

「それよりもうご飯出来てるよ。私を作ったんだよ」

そう言つてさあさあと秀一を家の中に押し込んでいくと家の中にはだれもいなかった。

「あれ？ 母さんは？」

いつもならそこには母親が帰りを待つているはずだった。しかしその日は美奈が突然訪れたのにもかかわらずいないことに秀一は少し不思議に思った。

「もういないよ。私たちだけだつて」

笑顔のままそうした答えが返ってきた。

また母さんは黙つてどっかに行ったのか。父さんがいなくなつてから母さんの放浪癖がひどくなつたと思つていたがこんなタイミンでいなくなるな、と秀一はこの場にはいない母親に対して一気に文句を心の中で言った。

「そうか……」

秀一は突然の美奈の来訪にうまく頭の中を整理できていなかった。本当に久しぶりであったため、どんな話をすればいいのか秀一はわからなかった。

「そういえばミナはいつまでいられるんだ？」

緊張しているのか変なことを聞いていた。

「え？ 私はずっといつしよだよ。シュウちゃんと約束したでしょ？」

秀一には一瞬何を言ってるのかよく分からなかったが

「家で何かあったのか？」

秀一には美奈が親とけんかして家出てきたのだろうとあたりを付けていた。それが当たっていたようでその一言で笑顔を崩さなかった美奈の表情が一瞬暗くなったが、すぐに笑顔にもどしていた。

「それよりもご飯食べよ。上手にできたんだよ」

美奈はそう言っただけで食事の準備をしていった。秀一はその姿を見て何も言う事が出来なくなりなされるがまま流されていった。その食事はどれも秀一が子供のころ美奈に話した自分の好きなものばかりで構成されていた。

子供のころなら確かに秀一にとって好物ばかりだったが成長した今になってはいくつかは少し遠慮したいものだったが、美奈の笑顔を見ていると断る気にはどうしてもなれなかった。秀一は美味しかったと美奈に素直な感想を述べると美奈はいつそう嬉しそうな笑顔になった。

「いやダメだから！ それだけは絶対にダメだつて！」

食事の後にあったことは秀一が半ば予想していたことでありそれだけは絶対にダメだと心に決めていたことであった。

「でも昔は一緒に入ってたのに……」

「そんな顔してもダメだ！」

秀一は美奈がお風呂と一緒に入りたいという願を必死に断っていた。昔は二人は家が近所であったため、たまにはそういったこともあだが今更この年で一緒に入るのには絶対に無理だと秀一は頑なに拒否していた。

「……わかった」

ようやく美奈が折れることになった。秀一の顔には安堵の表情が浮かんでいた。

しかしそれでも秀一には琴葉に対する申し訳のない思いがかなり残ったままであったが。

「でも寝るときは絶対に一緒の部屋だからね！」

その後も先ほどと同じようなやり取りがあり今度は美奈のほうに軍配が上がった。

どうしたものかと秀一は部屋で待つことになり、とりあえず諦めてよそから持ってきた布団を敷いておいた。

「……ごめん琴葉」

天井を見上げて呟いた。これは裏切りだと秀一は考えていた。ここまで美奈が強引だとは想定外であった。言い訳なんてできない。許されるとも考えていない。

「はああああ……」

深く秀一はため息をついた。一緒の部屋で寝るだけなんて言い訳は使いたくはないけど真実だしなあ、などと考えていると扉を開けて美奈が入ってきた。

「ごめんシュウちゃん。おまたせ」

そこには秋にしては薄着な寝巻に着替えた美奈が立っていた。

「おいその恰好はなんだミナ」

「へへへえシュウちゃんが喜ぶと思って……」

秀一はこれ以上何か言う事をあきらめた。

「もういいからとりあえずミナはそのベッドで寝ろ。俺はその隣の布団で寝るから」

そのときミナは驚いたような表情をしたがすぐに元の表情に戻っていた。

「うんわかった」

すぐにうなずきベッドの中に美奈は潜り込み秀一は電気を消して布団の中に入った。

「……久しぶりだねシュウちゃん」

その後あまり時間の立たないうちに美奈は秀一に話しかけてきた。「シュウちゃんは友達が何人もいたけど、ミナには全然いなくて

……シユウちゃんだけがミナに話しかけてくれたんだよ」

それは10年以上前の話であった。

「特にミナが泣いてるときはすぐに来てくれて、そばにいてくれてすごく嬉しかったんだよ」

秀一は美奈の言葉を聞きその時のことに思いをはせる。

「慰めてくれたり、笑わせてくれたりして……」

『そういえばあのころはミナが悲しそうな表情が嫌だったんだよな。できるだけそばにいて楽しませようとしてたんだよな。……でもどうしてそう思ったんだっけ。』

秀一は声に出さず昔のことを思い出していた。

「そういえばあったなあ」

「ねえ覚えてる？ あの言葉。ミナすごく嬉しかったんだよ」
秀一には思い当たることはなかったがそう言って変な空気にしたくなかったのか、

「そういえばあったな。ミナはちゃんと言える？」

そんなことを言ってごまかしていた。それを聞いて美奈はフツツと小さく笑い「もちろん言えるよ」と答えたが、秀一の記憶はそこまで途切れ夢の中に落ちて行っていた。

『えっと、やめるときも……すこやかなるときも……えっと……しがふたりを……わかつまで……えっと……』

『そういわなといけないの?』

『うん本にはそうかいてあつたんだよ……たしか』

『どういづいみな?』

『おかあさんにきいたら、どんなときでもしんじやうまではいっしよにいよつてことだつて……』

『ええ! しんじやつたらもうはなれるの! シュウちゃんとはもつといっしよにいたいよ』

『ぼくもそうだよ……そうだ! おかあさんにどういえばいいかきいておくね』

『ほんと! ミナもシュウちゃんとずっといっしよにいたいもんね』

秀一は楽しかった子供の頃の夢を見て目を覚ました。それは美奈と会ったことだがその原因であるであろう。秀一は心の中から湧き出す間隔に強い懐かしさと心地よさがあった。いつもより睡眠時間は短いはずなのだがすつきりとした目覚めであった。

ふと横にはベッドではなく自分の布団の中で気持ちよさそうに眠る美奈の姿があった。

「……いつ潜り込んだんだ」

あの時ちゃんとベッドに入っていたのは秀一にはわかってきたため、これはベッドから落ちて近くの布団に寝ぼけながら潜り込んだということにした。

そう結論付け細かい思考は放棄してキッチンに向かい朝食の準備をする。秀一は冷蔵庫の中で最初に目についた卵を使い目玉焼きを

作り後はみそ汁を作るだけで終わらせた。帰っていない母親の分を除き2人分の食事を机の上に並べていくと

「あーっ!」

ちようど部屋の入口にあたる部分に美奈が立ち大きな声を上げたのだった。

「朝ごはん……作らせちゃってごめんねシュウちゃん」

そう言って申し訳なさそうに泣きそうな表情をうかべた。

「いやミナはお客さんだしこっちは早く目覚めたし悪くないよ!」

秀一は一息で早口で説明をした。明らかに泣きそうであると秀一は判断したからだ。美奈のことをよく知っているからこそその正確な判断である。

「それじゃ次からはミナに頼むよ。そうしてくれると俺も助かるし」

「うん……」

表情は笑顔に近づいたが美奈の目は今にも泣きそうなものそのままであった。

「ミナは相変わらず泣き虫だな」

そう言いながら秀一は美奈の頭を撫でた。「僕の作った飯だつて旨いんだよ。食べて感想聞かしてよ」

そう言うと美奈は笑顔に戻っていた。

「それじゃあ飯を食べよっか」

秀一が美奈に背を向け歩き出したとき、美奈が突然抱きつき背中に顔を埋めてきた。

「ミ………!ミナ!」

いきなりの事で秀一は上手く言葉を放てなかった。

「シュウちゃんはいつも優しいね。ありがとう、明日こそは頑張るから」

言い終わるとそそくさと朝食を食べに向かっていった。

二人は向き合って座り和やかに朝食を食べていた。タイミングを見計らい秀一は美奈に質問をぶつけた。

「そういえばミナは高校どうしたんだ？」

「んゝ行ってないよ。だつて必要ないもん」

秀一は10年前の事を思い出さざるを得なかった。秀一自身が苦しんでいたように美奈も苦しんでいたはずだからだ。

秀一は己の考えのなさに心の中で悪態をついていた。

「そうか……。僕は学校に行くからミナはゆっくりしていきなよ」「うん。わかったよシユウちゃん」

間髪入れずに美奈は答えた。それを聞いて安心したのか、秀一は荷物を持って玄関に向かつていった。

秀一が玄関に手を掛けたとき、

「シユウちゃん！」

突然呼び止められた。

「どうしたん……！」

秀一は全ての言葉を発する事なく、唇と両頬に生まれた柔らかい感覚に意識を集中させられた。

それは秀一にとって完全に不意打ちな美奈の口づけだった。

「へへゝ行ってらっしゃいシユウちゃん！」

笑顔で手を振りながら見送る美奈に秀一は何も言えなくなり、逃げるように学校に向かつていった。

突然の訪問。美奈の行動。10年間ろくに連絡が無かったのにおかしな事ばかりだった。

秀一はその原因を考えながら思い足取りで学校に向かつて行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8334z/>

死が二人を...

2012年1月9日06時45分発行